



映画に  
宛てた  
ラブ  
レター

2015・12月号

天見谷行人

## ヒトラー暗殺、13分の誤算

---

ヒトラー暗殺、13分の誤算

2015年11月4日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

書き換えられない**13分**の「歴史」

ヒトラー暗殺をひとりで企てた、ある若き職人のお話です。

本作を手がけたオリバー・ヒルシュピーゲル監督には「[ヒトラー～最後の12日間～](#)」という秀作があります。

映画監督にとって「ヒトラー」という人類史上、類を見ない、最も有名な独裁者とその周辺は、誰しもが描いてみたい題材でしょう。

なによりヒルシュピーゲル監督にとっては、母国ドイツの「暗黒時代」「タブー」を描くわけです。

このあたり、歴史を冷静な目で淡々と見つめ、しかし、誰よりも情熱を持って「タブーである時代」を映画にする、その姿勢は評価されるべきです。

本作の舞台は戦前のドイツ。1920年代から第二次大戦末期までを描くものです。

主人公ゲオルク・エルザー（クリスティアン・フリーデル）は田舎町の出身。手に仕事をつけようと街に出て、時計職人の見習いになります。手先が器用な彼は、すぐに時計及び家具の職人として腕を上げて行きます。そんなとき、郷里から手紙が。酔っ払いの父親が、もう、手に負えなくなっただけです。そこで彼は職人道具を携えて里に戻ります。故郷に戻った彼は、人妻であるエルザと恋に落ちてしまいます。



時代はヒトラー率いるナチスが勢いをつけてきた頃。

ゲオルクの友人たちのなかに共産党員がいました。かれらはゲオルクの目の前でナチスに引きずり廻され、収容所送りになります。

ゲオルクは共産党員ではありませんでしたが、ヒトラーの強引すぎる政治に大きな危機感を抱えていました。

「このままではこの国はおかしくなる」

そんな折、1939年11月、ミュンヘンでヒトラーの演説会が開かれることを彼は知ります。会場に赴き、下見してみるゲオルク。

ヒトラーがそこに立つであろう演壇がすでにしつらえてあります。その後ろには柱があり、ナチスのシンボル、鉤十字の垂れ幕がかかっている。

ゲオルクはその柱を叩いてみました。どうやら空洞がある。

「これなら、いけるかもしれない」

彼は手に持った巻尺で、こっそり柱の寸法や奥行きを図り、メモしてゆきます。

やがて彼は、その器用な手先と時計職人のノウハウを生かして、一つの時限爆弾を作り上げました。

「あの男さえ吹き飛ばしてしまえば、この国は……。」

運命の11月8日、爆弾はゲオルクが仕掛けた時刻通りに爆発。

8人が死亡します。しかし、そのなかに、なぜかヒトラーだけはいなかったのです……。

本作は「ヒトラー～最後の12日間～」に比べ、正直、一般受けはどうか？ という内容です。



というのも、ドイツが無謀な戦争に踏み込む、その直前の時期。まさに時代のエアポケットとい  
いましょうか、戦争前夜の予備知識が必要だからです。

ひとりの平凡な職人を通してみた、ドイツの「歴史のスキマ」を、本作では丁寧に描いています  
。

1932年から1939年という7年間、ドイツにとっては、まさに大きな渦に飲み込まれるかのような  
時代でした。

僕は以前からヒトラーとその時代に興味があり、少しばかりの予備知識がありました。

本作で描かれるワイマール共和国末期、片田舎の日常風景。

それが僕にはもう、”ビンビン”響きました。これぞ、僕が見たかった戦争直前のドイツの姿。

ゲオルクが暮らす田舎の集落には、自動車も乗り合いバスもありません。さらには集落には車を持  
っている人が一人もいません。

ここが重要なんです。

実は、戦前のドイツ（1932年のデータ）で車を持っている人は、国民あたり約100人に1人程  
度でした。同じ時期、アメリカでは5人に1人は車を持っていました。

ドイツという国は、当時から工業技術は優れていたものの、車の普及という点では、大変な後進  
国でした。これ、意外に知られていない事実なのです。

また、世界恐慌の影響もあり、誰もが貧しかったのです。ヒトラーはそこに巧みにつけ込みま  
した。

ヒトラーとナチス党が催したイベントでは、軽食が出され、ビールが飲み放題！さらには党主  
催の旅行企画や、音楽会、ダンス、映画の上映会など、娯楽でいっぱい。その上さらにヒトラ  
ーは、一般大衆の目の前に「美味しいニンジン」をぶら下げました。

「全ての家庭にラジオを！！」と安価なラジオを販売。

ラジオで全ての国民が、ナチスの息のかかった放送を身近に聞けるようになる。それはナチスの  
プロパガンダのため、とても重要なことでした。

そして、これでもか！とヒトラーが目玉商品（政策?!）としてブチ上げたのが、あの有名な国  
民車「フォルクスワーゲン」だったのです。

「労働者諸君！！自分の車を運転したければ週に5マルク貯金せよ！」

ヒトラーの掛け声に、大衆はまさに熱狂しました。

働けば、暮らしが豊かになり、ラジオが持てて、その上、夢にまで見た「マイカー」が手に  
入る！！

こうして33万人の国民が、フォルクスワーゲンを買うために貯金を始めます。

ヒトラーが首相に就任した1933年以降、ドイツは目を見張るような復興を遂げて行きます。これ  
は「ヒトラーの奇跡」とも呼ばれているようです。

さて、本作では湖畔で、ゲオルクを含む若者たち男女が、ギターを片手に歌を唄うシーンがあり  
ます。

その曲はあきらかにアメリカから入ってきた「ジャズ」なんですね。

何気ないようですが、これも実は極めて重要な視点なんです。

さすがヒルシュペーゲル監督、と僕は思いました。

ヒトラーとナチスは、「ドイツ文化」が「汚される」ことに極めて敏感でした。音楽においてもそうです。元々のルーツを黒人音楽にもつ「ジャズ」などは「退廃的である」と軽蔑していたのです。

それでも若者たちは、いわゆる「流行り物」「カッコイイ」音楽である、「ジャズ」に夢中になります。のちに彼らは「ジャズ青年」というレッテルを貼られ、ナチスの標的になります。好きな音楽を演奏したら収容所送り！！ いかにも異常な時代であったかがうかがい知れます。



さて、ヒトラーという人物に対しては、何度も暗殺計画があったことが知られています。実に不思議なことに、ヒトラー本人はなぜか「神懸かり」とでも言える嗅覚、直感をもって、この「危機一髪」を本能的に逃れています。

極度の緊張を強いられる、国家元首であり、独裁者、そして世界を相手に戦争を始めてしまったバイエルンの伝令兵、ヒトラー。

その研ぎ澄まされた感覚から、一種の靈感、第六感、のようなものを身につけていたのかもしれませんが。

本作の主人公、ゲオルクの精緻極まる時限爆弾は、正確に時を刻みます。しかし、なぜかこの時もヒトラーは、13分早く演説を切り上げたのです。間一髪この独裁者は難を逃れます。

ゲオルクの作り上げた時限爆弾は、彼のセットした時刻通りに爆発しました。それは歯車の集まりであり、機械式のカラクリでありました。

歴史に「たられれば」はありえませんが、それでもゲオルクの作った機械仕掛けは、紛れもなく歴史を変えた可能性のある歯車だったのです。

\*\*\*

なお、参考、引用させていただいた文献は以下の通りです。

「魅惑する帝国―政治の美学化とナチズム」 田野大輔 著 名古屋大学出版会

「ナチズムとドイツ自動車工業」 西牟田 祐二 著 有斐閣

「ヒトラー権力の本質」 イアン カーショール 著 白水社

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 オリバー・ヒルシュピーゲル

主演 クリスティアン・フリーデル、カタリーナ・シュトラール

製作 2015年 ドイツ

上映時間 114分

予告編映像はこちら

[「ヒトラー暗殺、13分の誤算」予告編](#)

エール！

---

エール！

2015年11月16日 [シネ・リーブル神戸](#) にて鑑賞

ポーラの家族にエール！

映画を見終わった後、爽やかな余韻が残る作品です。

エンディングで披露される、主人公ポーラの歌声は圧巻。

彼女はフランスの田舎町の高校生です。

合唱の授業を受け持った音楽教師から、天性の歌声の素晴らしさを見出されたポーラ。

「君をパリの音楽学校へ推薦したい」

ど田舎の集落しか知らない高校生にとっては夢のような話です。

音楽学校入試のための特訓が始まります。

しかし、ポーラは今ひとつ練習に身が入りません。彼女には、一つの悩みがありました。

彼女の家族は、パパ、ママ、弟、みんな耳が聞こえず、話ができない、聾啞者なのです。健常者はポーラただ一人。

本作の冒頭、よく注目してください。一家の食卓の風景が映し出されます。

ママは料理をしている。テーブルにお皿の用意をする。

ここ、バックに音楽を入れてないんです。

そしてママは料理をする時に、鍋を必要以上にガチャガチャ言わせる。お皿とお皿がガチャガチャぶつかる。

これらの音がわざと強調されて観客に提示されます。

ポーラは「うるさいなあ〜」とうんざりした顔をしているのですが、パパもママも全然気にしていない感じなのです。

だって、パパもママも、これらのうるさい「生活音」は、「聞こえていない」のですから。

ポーラの家族は一家総出で酪農を営んでいます。自家製チーズを作り、市場で販売する。お客さんとのやりとりは、いままでポーラの担当でした。





でも、もしポーラがパリの音楽学校へ行ってしまったら、残された家族はどうするのか？  
聾啞者の家族が、健常者相手にまともに商売ができるのでしょうか？

本作は、一人の才能あふれる女子高生と、彼女を愛情たっぷりに育て上げた聾啞の家族のお話です。

障害者というモチーフを作品に持ち込んでいますが、全然暗さや湿っぽさを感じさせない。むしろ、終始コミカルなタッチで描かれています。

この辺りが監督の手腕ですね。

たくましさあふれるパパ、人一倍ポジティブで、楽道家なママ。

ちょっと根暗だけど、愛おしい弟。

みんな聾啞というハンディキャップはあるけれど、ポーラにとっては何物にも代えがたい家族です。

時にはちょっと厄介でめんどくさいけれど、何があっても家族全員で問題に立ち向かう。それがポーラの家族の特徴なんですね。

折しも、村長選挙が間近に迫ってきました。立候補者は、この集落に大企業を誘致するんだ！と威勢のいいことをアピールして廻ります。

企業誘致？！ そんなことされたら、ポーラ一家の農場だって買収されてしまうかもしれない。そこでポーラのパパはなんと村長選挙に立候補。

集落の農業、酪農を守るんだ！！ とパパはやる気満々。

ちょっと暴走気味の姿は、まるでドン・キホーテのようでもあります。

そんなパパをポーラたちも家族ぐるみで応援。



これら一連のエピソードがうまく編集され、この家族の暮らしそのものが、いとおいしいほどの「可笑しみ」の表現につながっているんですね。



また、パパ、ママ、ポーラたちは「手話」で話をします。その間、観客は字幕と俳優たちのマイムで会話の内容を知るわけですね。

この部分、要するに「無声映画」なのです。

かつてのチャップリンやキートンが活躍した時代は無声映画でした。

映画俳優は言葉を喋らなかったのです。

本作はその無声映画の時代へ、あえて先祖帰りした感じがあります。

そういえば同じくフランス映画で、第84回アカデミー賞作品賞を受賞した[「アーティスト」](#)（2011年製作）という素晴らしい無声映画がありました。

セリフが一切なくても、マイムだけで十分に映画芸術は成り立つのだ、ということ、21世紀の現代で証明した作品でありました。

本作もその流れを巧みに取り入れているのです。

なお、僕が本作で改めて確認させられたのは、フランスは農業大国なのだ、ということです。

日本であれば、家族単位の農業というと「零細」のイメージが当たり前です。

ところが、ポーラの家族農場、その規模の大きいこと。お父さんの乗るトラクターのタイヤは人の背丈より大きいのです。この大きなトラクターで広大な農場の干し草を刈り取り、牛の餌にしています。

そして、ポーラの住む家の雰囲気もまたいいですね。年代を経たであろうと思わせる石積みでつくられた、郷愁を感じさせる家なんですね。

たとえ、家族が聾啞という障害を抱えようとも、ポーラをど〜んと受け止めてくれる、暖かな家庭。その象徴のような石造りの家。

この家族だからこそ、ローラは未来へ向けて一步を踏み出せたのでしょうか。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 エリック・ラルティゴ

主演 ルアンヌ・エメラ、カリン・ビアール、フランソワ・ダミアン

製作 2014年 フランス

上映時間 105分

予告編映像はこちら

[「エール！」予告編](#)

## シャーリー&ヒンダ ウォール街を出禁になった2人

---

シャーリー&ヒンダ ウォール街を出禁になった2人

2015年11月27日 [元町映画館](#) にて鑑賞

お金じゃないのよ、人生は！

予告編を見たときから、このドキュメンタリー映画は、とっても楽しみにしていた。

電動車椅子に乗るおばあちゃん二人が「経済成長って必要なの？」と大学教授や、ウォール街のセレブたちに果敢に挑む、という内容である。

このおばあちゃん二人は、シャーリーが92歳、ヒンダが86歳。

いわゆる「アラナイ」アROUND 90歳という高齢だ。

アメリカ、シアトルの田舎町に住んでいる。

普段は歩くのも支障があるので、外出は電動車椅子。トコトコと踏切を渡り、スーパーマーケットに向かう。

その途中に、ホームレスの人たちが多くいる。

ニュースや新聞では、年金だけでは家賃も払えなくて、家を追い出された、とか、今は不景気だ、という。それを解決するのが「経済成長だ」と偉い人たちが言っている。

スーパーで買い物をしながら、二人は

「もっと無駄使いしろってことなの？ いらないモノをたくさん買って、それで世の中良くなるのかしら？」

と素朴な疑問を持つ。

売り場では、陳列された洋服ハンガーにぶつかったり、物を落っことしたりと、何事も若い人たちのようにスムーズに動けない。

そんな二人が「アラナイ」にして、ついに経済問題に目覚めるのである。





なお、本作では明らかに演出が入っていることは確かである。

それを「ヤラセ」と見るかどうかは、観る人それぞれの主観に任せていいと僕は思う。

以前観た[「世界の果ての通学路」](#)というドキュメンタリー映画。

世界各国の僻地の子供達が、学校に行くために、どのような困難を強いられているか、を描いた作品である。

この作品でもやはり、あきらかな「演出」があった。

しかし、それは観客に対して、意図的に事実の歪曲を狙ったものではなかったと僕は解釈している。

さて、シャーリーとヒンダは、「とりあえず、やってみることよ」と、大学に経済学の授業を聴講したい、と申し込んだ。

幸いにも聴講は許される。

教室の中。電動車椅子に乗った二人のおばあちゃん。若い学生たち。なんとも場違いで、ちょっと気まずい雰囲気の中、授業が始まる。

訊きたいことを質問するため手を挙げる、二人の年老いた聴講生。

しかし教授の対応は冷たかった。

「授業中の質問は、一切受け付けない、いやなら退室しなさい」とのこと。

電動車椅子でゆっくり教室を出て行く二人。

でも、いやな先生ばかりではない。

二人はツテを頼って、年老いた物理の教授から話を聞くことができた。

その老大家は言う。

「世の中の人たちは”指数関数”について、何も分かっちゃいませんね」

老大家は、アメーバのたとえ話を二人に披露した。

瓶の中にアメーバを飼う。

アメーバは1分で二つに増えてゆく、とする。

さて、11時に瓶の中へ、アメーバをたった一つだけ入れてみる。

しかし12時、アメーバはみるみる増殖し、瓶の中から溢れて出してしまった……と仮定する。

ここで教授から質問。

「さて、瓶の中が半分になったのは何時何分でしょうか？」

シャーリーとヒンダは、ふう～むと考え込む。

やがて、

「そうねえ、たぶん11時59分でしょ」

ご名答！！

素晴らしい！！ファンタスティック！！

先生はにっこり。

「だって1分で倍になるんですもの。12時の1分前は、瓶の中は半分だったってことよ！」

続いて質問。

「じゃあ、アメーバが、このままだと瓶から溢れる！！と気がつくのは、何時何分でしょうね？」

老教授はニヤリとする。

そう、瓶に半分の時でも、まだ、誰もが気づかないのだ。残された時間は、あと、たった1分しかないのに……

これがまさに今、地球と人類が抱える問題なのだ。

先生は優しく解説してくれる。

「経済を5% ”成長させ続ける”ということは、このアメーバの理屈と全く同じです。全世界の人達が、アメリカの一般市民と同じ暮らしを『維持する』だけで、地球があと4個か5個、必要なのですよ」

そして首をすくめる。

「もっとも最近宇宙では、地球のような”いい物件”はまだ出回ってませんがね」

環境経済学の先生の話も興味深い。

先生は優しくシャーリーとヒンダに説明する。

「資源を使ったら、その資源が自然によって再生されるまでは、次の資源を使わないことです」このシーンは数分である。その中で観客である僕が理解するには、ちょっと解説が複雑だった。要するにこれを一言で言い表すのが「サステイナブル」という用語なのだろう。

—持続可能—

右肩上がりの成長が全てを解決するのだ、という偉い人たちがいる。勝ち組の論理は、富める者たちが、現状の富をさらに増やし続けるための、都合のいい論理だ。

この人たちはきっと、自分たちが地球をショートケーキのように切り分けて食べ続けていること

を自覚していない。

**2人合わせて178歳のウォール街への快進撃、はじまる!**

本作は92歳のシャーリーと86歳のヒンダが自分たちだけの力で「経済成長」についての答えを探す姿を描いたドキュメンタリー作品。2人は大金持ちでも、ビジネスマンでもない、ただのシアトルに住むおばあちゃん。当初は「買い物に行くくらいしか思いつかない」とっていた2人は、大学生、大学教授、経済アナリストへ質問を繰り返すうちにどんどん成長。時にバカにされ、門前払いをくらひ、脅されても「知りたい」という2人の情熱は止められない。遂には、世界経済の中心NYのウォール街へ飛び出していく。カメラは無邪気に「わからない」事を知りたいという欲求を満たしていくやんちゃな2人の姿を映す一方で、世界のどこの新聞にも書かれている、ごくありふれた話題を、私たちは深く考えることもなく、知っているつもりで見過ごしている事を気づかせてくれる。そして、好奇心旺盛で、色々な事に興味を持ち続けられるのは、人生をより豊かにしてくれるのだと教えてくれる。監督のホルバト・ブストネスはノルウェーのアカデミー賞「アマンダアワード」で劇場ドキュメンタリー賞受賞の経験もある実力派。経済の知識がなかったって、シャーリー&ヒンダを見れば、世界の見え方がちょっと変わってくるはず。

監督:ホルバト・ブストネス 出演:シャーリー・モリソン、ヒンダ・キプニス ほか  
2013年 / ノルウェー・デンマーク・イタリア / 英語 / カラー / DCP / 82分 /  
原題:TWO RAGING GRANNIES / 日本語字幕:田中武人 / 配給:S・D・P



# NO ENTRY

TWO PEOPLE WHO ARE BANNED FROM WALL STREET

**SHIRLEY MORRISON**  
シャーリー・モリソン

- 活動団体のメンバー「RAGING GRANNIES」
- 逮捕歴あり

**HINDA KIPNIS**  
ヒンダ・キプニス

- 両親はロシア革命中アメリカに移住
- ダンサー

shirley-hinda.com



こういう一握りの「特権階級」を自認している人たちが集まる、ディナーパーティーが開かれる。

このパーティーにシャーリーとヒンダ、二人のおばあちゃんが挑む。

「質問したいの!」

「成長は必要なの?」

「私たちに、分かるように教えて欲しいの!」

あまりにも素朴すぎる質問。会場に居合わせたセレブ達は失笑する。しかし、二人は真剣だ。

やがて屈強なボディガードが現れ、二人はパーティー会場からつまみだされてしまう。

しかも脅迫めいた言葉と共にだ。

こうして二人はウォール街を「出禁」になってしまう……

というのは、実は日本語版スタッフが作ったキャッチコピーである。

さて、二人にはよく分かっている。

もうじきお迎えがやってくる。

今の自分たちが欲しいのは、「お金」や「モノ」でもなく、憐みでもない。

彼女たちが最も欲しいのは、時間なのだ。

彼女たちは「経済成長は人を幸せにするのか?」という巨大なテーマに出会ってしまった。

それに気がついたのは残念ながら、シャーリーが92歳、ヒンダが86歳になってからのことだったので。

この大きな命題を解く鍵が欲しい。それにはもちろん勉強したり、人を訪ねて行ったり、何かと



時間がかかる。

彼女たちはある意味、幸せな老人たちなのかもしれない。

自分達の残された時間で、取り組むべき課題を見つけている人だからだ。

その命題が解けるまで、とてもじゃないが「死んでたまるもんですか！」

と二人は奮闘する。

この二人の「怖いもの知らず」の行動に、観客は爽やかさを感じる。

なぜだろう。

おそらくそれは、彼女達が「無私」であるからだ。

彼女達は自分たちの残り時間が少ないことを知っている。

こういう人たちが、何か人のために、と覚悟を決めた時、もう、この世に怖いものなど存在しないのだ。

自分がこの世を去った時、子どもや孫達が、よりよい世界で暮らしてほしい。

よりよい世界を残したい。

そんな「無私の心」が僕たち観客の胸を打つのだ。

ちなみに本作の上映時間は90分にも満たない。82分だ。

しかし、このチャーミングな、おばあちゃん達のエネルギーと、生き続ける勇気に、十分すぎるほどの満足感をもらえる82分なのである。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 ホバルト・ブストネス

主演 シャーリー・モリソン、ヒンダ・キプニス

製作 2013年 ノルウェー、デンマーク、イタリア

上映時間 82分

予告編映像はこちら

[「シャーリー&ヒンダ ウォール街を出禁になった2人」予告編](#)

## FOUJITA

2015年11月24日 [神戸国際松竹](#) にて鑑賞

「フーフー」と、キツネの贖罪

小栗康平監督がレオナルド・フジタの映画を完成させた、と聴いて、ちょっと胸騒ぎがした。

「早く観にいきたい」という気持ちと、「もしかして……」という一抹の不安、相反する気持ちがあったのだ。

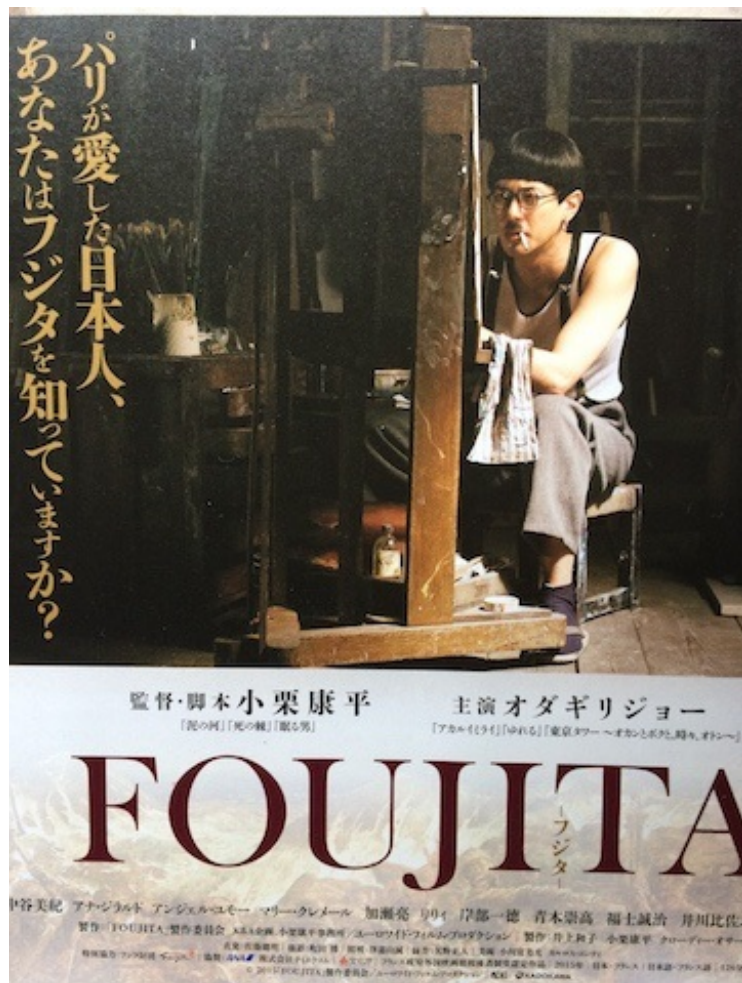
僕は小栗康平監督の「埋もれ木」という作品を、名古屋のミニシアターで鑑賞した。2005年のことだったと思う。

そのあまりの抽象性に「さっぱり訳がわからん」とひどく落胆した、嫌な思い出があったのだ。

レオナルド・フジタ（藤田嗣治）は映画の題材として、あまりに魅力的だ。

しかもフジタを演じるのは、オダギリジョーだという。

いやはや、この作品は魅力的すぎる！！



こんな美味しいニンジンをぶら下げられたら、もう映画好き、美術好きとしては劇場に向かって走る以外ないだろう。

しかしである。

もし、ここで、小栗監督お得意の抽象性で描かれたら、もう本作は、それこそ太平洋戦争末期の

日本軍さながらに、映画興行として「玉砕」してしまうのだ。

そんな不安を抱えながら僕は劇場にいそいそと向かった。

上映が始まると、僕の不安は安堵に変わった。

小栗監督は所々でやはり、抽象性を挟みつつも、実に丁寧に抑制された演出で、淡々と藤田嗣治と女たち、そして彼が生きた時代を描いて見せるのである。

映画前半、エコール・ド・パリでの「フジタ」

彼の描く乳白色の裸婦像は、パリっ子たちにとって「東洋の神秘」

「誰も真似できない」として絶賛されまくる。

夜の街に繰り出せば、誰もが彼を「フーフー」という愛称で呼ぶ（ちなみに、これは「お調子者」という意味らしい）

彼はパリのアーティストたちの、まさに中心人物として担ぎ上げられる。

束の間の平和、日ごと、夜ごとの乱痴気騒ぎ。

「フジタ」はパリで最も有名な日本人として、時代の「波」に乗った。

芸術家たちにとって、なんと幸せな時期であっただろう。

しかし、すぐ暗黒の時代がやってくる。

映画の後半は、まさに作品をバツサリと真っ二つに切ったかのようだ。

舞台は戦時下の大日本帝国。

そこにはもう乱痴気騒ぎはない。

あるのは疎開先での質素な田舎暮らし。

そして軍から集落に強要される、定期的な「金属の供出」である。

フジタはフランス帰りの洋画の大家として、日本軍に迎えられる。

戦意高揚のため、戦争絵画を描くように軍から要請されるのだ。

彼は軍から請われるまま、アツツ島玉砕の大作を描く。

フジタは、その玉砕を美化した、日本軍の協力者として、戦後に激しいバッシングを受けることになる。彼は故郷ニッポンの地を二度と踏むことなく、スイスのアトリエでその一生を終える...

...

本作は彼の戦後については、あえて描いてはいない。





# 1920年代、 フランス・パリ。

「乳白色の肌」で裸婦を描き、

エコール・ド・パリの寵児となったフジタ。

美しいパリジエヌたちと出会い、別れ、

フジタは狂乱のパリを生き抜いた。

ピカソ、モディリアーニ、ドンゲン、

スーチン、キスリング……

時代を彩る画家たちとともに。

# 1940年代、 戦時の日本。

パリ陥落を前に日本に戻った

フジタは「アツ島玉砕」ほか

数多くの戦争協力画を描き、

日本美術界の重鎮に上りつめていく。

5番目の妻となった君代と、

疎開先の村で敗戦を迎えることとなるが……

疎開先でのフジタは、ある日、知人からキツネに「化けかされる」話を聞いた。

「そんな迷信を……」とフジタは笑う。

しかし、残酷な戦争は、フジタ自身をキツネにしてしまったのかもしれない。

彼は日本軍から「少将待遇」という、とんでもない高い位を与えられる。

その象徴として、将軍が羽織る、マントをもらっていたのだ。

そのマントを羽織って、下駄を履いて、田舎の里山を散策するフジタ。

これがエコール・ド・パリで一斉を風靡した、同じ人間なのか……

化かされたのは誰か？ 化かしたのはだれか？

滑稽なまでのマント姿のフジタ。

それを淡々と演じるオダギリジョー。

時代に弄ばれたフジタの姿はあまりに痛々しい。

なお、本作では描かれていないが、フジタは生涯の終わりに、教会の壁画を手がける。自身手がけたことのないフレスコ画への挑戦だった。

フランスに帰化し、カトリックの洗礼を受けたレオナルド・フジタ。

自分が犯した罪と罰。

それをどう裁くのかは「神様」が決めてくれるだろう。

絵描きは絵描きとしての責任を全うすべきなのだ、という、フジタなりの決着のつけ方ではなかったか？

本作のエンドロールで映される、その小さな教会を眺めながら、僕はそんなふうに思った。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 小栗康平

主演 オダギリジョー、中谷美紀、アナ・ジラルド

製作 2015年 日本・フランス合作

上映時間 126分

予告編映像はこちら

[「FOUJITA」予告編](#)

ガールズ&パンツァー劇場版

2015年11月30日 [OSシネマズ神戸ハーバーランド](#) にて鑑賞

世界平和のために「パンツァー、フォー！」

え～、何と申しましょうか。ミリタリーオタクとまではいきませんが、ミリタリー好きなアマミヤでございます。本作は完全に戦車マニア・ミリオタ向けです。よって、一般の方のご批判は、その分ちょっと割引いていただいて……

なんぞと思っていたのですが。

テレビシリーズでファンになった僕から見ても、本作は明らかに

「つまらんぞお～！！」と言いたくなる出来でしたねえ。

「ガールズ&パンツァー」をご存じない方に、ちょっと解説です。

このお話は、「茶道」や「華道」などと同じように「大和撫子の嗜み」として「戦車道」があるという設定になっています。また「お茶」の裏千家、表千家、武者小路千家のような「流派」まであるんですね。

戦車道がある高校は「学園艦」という、巨大な航空母艦のような船が母校なのです。そこは一つの街になっておりまして、高校生達の家族と一緒に住んでいます。

さて、主人公の”西住みほ”は「戦車道西住流」家元の次女です。





(写真、真ん中の子が、西住みほ)

実は彼女、戦車道の試合で、あるトラウマを抱えておりまして、親元から離れて、戦車道のない「県立大洗女子学園」に転校してきました。そこで友人もでき、ホッとしたのもつかの間。なんと転校してきたばかりの母校が廃校の危機に。それを救う条件がありました。「戦車道全国大会」で優勝すれば文科省から廃校を免れる、というのです。そこで西住みほは、生徒会のゴリ押しもあって戦車道の隊長に就任。

伝統ある西住流戦車道のDNAなのでしょう。大洗女子学園は見事全国大会優勝を勝ち取ります。しかし、廃校の危機は去った訳ではなかったのです.....

やっぱりねえ「ガルパン」も、いわゆる萌え系、女子高生系列の路線に乗っかって出てきた、作品だと思うわけです。

ただ、女子高生が「戦車」に乗って戦う、というありえない「ぶっ飛んだ」インパクトが強烈だったんですね。

それが視聴者の度肝を抜き、アニメファンが文字通り「食いついた」訳です。

フツーの女子高生を「リアルに」「ふつう」に描いた作品としては、廃部寸前の軽音楽部に入部した、女子高生達を描いた「けいおん！」がたいへんなブームになりましたね。彼女達は「[涼宮ハルヒシリーズ](#)」や「[中二病でも恋がしたい](#)」などの作品のように、自意識過剰のあまり、宇宙空間へワープしたりするようなことはありません。

また、その真逆もアリなのがアニメの魅力でして「[時をかける少女](#)」や「[サマーウォーズ](#)」のような、異次元空間を扱ったようなSF作品も人気があります。

これらの作品に共通するのは、

「魂は細部に宿る」

というセオリーを守っていることです。

そしてなにより

「子供達に対して子供扱いしない」ということ。

それをきちんと分っていらっしゃるのが、あの巨匠、宮崎駿監督であることは、僕が言うまでもないでしょう。

実は男子という生き物は、たとえ五十や六十になっても、やんちゃで、変なことにこだわったりする、愚かしい「子供」の部分があるのです。

（ちなみに男のアホさ加減「いくつになっても子供」であることを、端的に表現したのが、宮崎駿監督の『[紅の豚](#)』という作品ですね。ぼくはこれ大好きなんです。名作だと思ってます）  
そんな子供みたいなオッサン達を、優しく母のように包み込んでくれるのが、女性にしかない「母性」というものであります。

「オトコ」を戦車のようにうまく操縦するには、世の女性の皆さん、ここら辺りの「男のアホさ加減」をよお〜くご理解の上、ご配慮くださいますよう、よろしくお願い申し上げます次第です。

はて、僕は何を書いているんでしたっけね。

そうそう「ガールズ&パンツァー」のことですよ。

本作も細部はちゃんと描けてます。

戦車のメカニズム、ディティールの表現そのものには、ちゃんと魂入ってます。しかしながら、僕が本作で一番、不満だったのは

「子供扱いされたこと」だったのです。

戦車ファンが観客だろうから、戦車どうしの闘いを、たくさん描けばいいだろう、というのは、いかにも安直すぎやしませんか？

これ、観客として、明らかに見くびられているぞ、と思う訳です。

先にあげた「けいおん！」や「サマーウォーズ」などは違いますね。

どこが違うか？

登場人物達が「ちゃんと生きてる」感じがします。彼女達、彼らは失敗もするし、葛藤し「ちゃんと悩む」んですね。

漫画界の巨人である手塚治虫氏は、はっきりと「勸善懲悪モノは描かない」と述べられています。その典型が、無免許ながら、天才的な外科医の腕を持ち、途方もない報酬をふんだくる男「ブラック・ジャック」です。

彼もまた「命とは何か？」に悩む一人の医師でもあります。

かつて鉄腕アトムをアニメ化するときにも、手塚氏は言いました。

「アトムはもっと悩むんです。ハムレットのように」

そして手塚氏は子供達に「一流の」作品を届けようと思いました。

子供達だからこそ「一流」に触れておくべきだ、という信念があったのでしょうか。

「ガルパン」テレビシリーズでは、ちゃんと登場人物達が生きてた感じがします。彼女達はそれ

ぞれ、若さゆえの悩みや、葛藤、家庭の事情を抱え、彼女らなりに「大和撫子の嗜み」とされる「戦車道」に打ち込みます。

そこに彼女達の、未完成ではあるけれど、一所懸命頑張っている姿、不器用で、傷つきながらも成長する姿に、見るものは親近感を抱き、惹きつけられるんですね。



本作では、すでにテレビシリーズをご覧になった方、もう「ガルパン」のキャラクターは知り尽くしているよ、というファンの方なら、それなりに満足感は得られると思います。

お子様向けアニメ作品であろうが、映画は世相を反映してもいいし、また、紛れもなく時代の表層に乗っかるものでもあります。いま日本では、安保関連法案が成立し、集団的自衛権とか、自衛隊の海外でのドンパチも間近なのか？ など、軍事面での動きがクローズアップされております。

その中でなぜいま「戦車のアニメ」なのか？

本作は「戦意高揚」「プロパガンダ」ではないのか？ といった具合に勘繰られてもしたかない部分さえあります。

であるならば、その批判を逆手に取り、もっと志を高く持って、世界の平和のために、この「ガルパン」を活用してみてもどうか？ と僕は思う訳です。

本作は女子高生と「戦車」という「ぶっ飛んだ」組み合わせです。

これだけぶっ飛んだ企画なのに、なぜチマチマと「大洗」の市街地だけを舞台にするのか？

[「けいおん！」劇場版](#) ではイギリスに卒業旅行しましたね。

ならば「ガルパン」も世界に打って出るというのはどうでしょう。

例えば、国連主催の平和イベントとして、世界戦車道選手権大会みたいなのが開かれる。そこで



日本の片隅の地方都市、大洗の街からやってきた、西住みほ達五人が、世界中の高校生達、そして多様な戦車とその戦い方を通して、そのお国柄、文化にふれあう、交流する。

ロシア人や、中国人はこんな風に考えているのかあ〜とか、フランス人は時に死んだふりをしてやり過ごす、とか、さらには中東、[イスラエルの戦車](#) だってメカニズムは素晴らしいものがあります。

その国の文化、考え方、技術力、国力、すべてが実に分かりやすく反映されるのが、意外にも「戦車」を含めた「武器」に他なりません。

たかが戦車ですが、されど「戦車」でもあるのです。

僕を含め戦車に夢中になっている「男の子」たち。その「子供心」

その一端でもちょっとお分りいただければ幸いです。

\*\*\*\*\*

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

\*\*\*\*\*

作品データ

監督 水島努

声の出演 漕上舞、茅野愛衣、尾崎真実、中上育実、井口裕香

製作 2015年

上映時間 119分

予告編映像はこちら

[「ガールズ&パンツァー劇場版」予告編](#)



## 2015・12月号映画に宛てたラブレター

<http://p.booklog.jp/book/102467>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102467>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102467>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ